

コンサルテーション・リエゾン精神医学を経験して感じる事

公益社団法人熊本県精神科協会 理事 寺岡和廣

熊精協会誌の巻頭言の執筆依頼がありました。どんな内容でも構いませんと言うお話でしたがなかなか考えが浮かばず、やっと執筆した日が、“敬老の日”でした。

私は平成元年に熊本大学精神科に入局し精神科医として30年になりますが、最近高齢者の診察が多くなった気がします。総務省が9月16日に発表した人口推計(15日時点)によると、70歳以上が前年から100万人増の2618万人で、総人口の20.7%を占め、国民の5人に1人に相当する割合を初めて超えています。高齢者(65歳以上)は44万人増の3557万人で過去最多を更新し、そのうち女性が2012万人と2千万人台に達し、男性の1545万人を大きく上回っています。70歳以上の20%超えは団塊の世代(1947年～49年生まれ)が2017年から70歳を迎え始めたことが影響しているそうです。近年の診断技術の開発、治療技術の進歩から、様々な身体疾患が治療可能な疾患と捉えられるようになっており、高齢者だけではなく、精神科への相談が益々増えて行くと考えます。そこで私が今まで経験し、更に今後も精神科医として学んで行きたい事を執筆する事にしました。

私は平成3年から一年間東京へ勉強に行きました。その時にコンサルテーション・リエゾン精神医学を専門とする東海大学の岩崎徹也教授に色々な事を教えて頂きました。コンサルテーション(Consultation)とは、相談・助言と言う事で、“他科の医師が患者の精神的問題を発見し、その要請でいわば外部にいる精神科医が相談にのる形態”の事です。リエゾン(Liaison)とは、連絡・連携と言う事で、“最初から他科の医師と精神科医とが共同して病棟診療にあたっていて、いわば

内部にいる精神科医自身が問題を発見し治療にあたる形態”の事です。要するに、コンサルテーション・リエゾン精神医学(Consultation - Liaison Psychiatry)とは“他の診療科と協力して患者の診療にあたる精神科の領域の事”です。相談内容は色々なものがありますが、例えば、“大声を出して騒ぐ、ウロウロと徘徊する等のせん妄状態”、“治療を受けているのに全然症状が良くならないので気分が沈み、死にたくなる等のうつ状態”、“癌と診断されて治療を行っているが、不安が強くてどうしたら良いのかわからない等と訴える緩和ケア”等があげられます。精神科医へ紹介される際には、1)患者が見捨てられたという感覚を持たないように注意、2)問題を具体的に取り上げながら、その問題を専門家に相談してみることを勧める、3)問題が解決した後に患者の希望がある場合には、再度治療を引き受けることを伝える、4)それでも患者が精神科受診を頑なに拒否するなら、病状を家族に説明して受診を説得してもらうことも考える等が重要で他科の医師には伝えています。

精神疾患に罹患している患者様達は自分の人生を考えると本当に辛いかも知れません。しかし一度しかない人生を後悔しないように、少しでもお役に立てればと考えています。これからも私が精神科医として頑張っていく為には、精神科以外の医師をはじめ、患者様やその御家族等、多くの方々の支えが必要だと考えています。私も来年はいよいよ60歳を迎えます。人生の最後を笑顔で迎えられる事を目標と考えているので、今後も引き続き皆様に支えていただければと思っております。